八丈島における巫俗の一考察

土　屋　　久*

Note on the Shamanism in the Hachijo-jima Islands

Hisashi Tsuchiya

はじめに

伊豆諸島の南に位置する八丈島には、近年までミコが存在し、その影響は島民の日常生活の隅々にまで及んでいた。江戸時代、八丈島へ流された武士、近藤富蔵（1805-1887）は、『八丈實記』の中でミコの存在を次のように批判的に記している。

巫女ト云フモノ嶋中ニ横行シテ愚民ヲ惑スコト少カラス［近藤　1971：121］

富蔵のミコ批判が的を得たものであるかどうかの判断は置くとしても、彼の記述からは、当時の島の生活に占めるミコの存在の大きさが窺われよう。

しかし、2002年に島内で唯一のミコが96歳で亡くなり、現在（2005年12月）、島では表立ってミコとして活動している人物は存在しない。八丈島の伝統的な巫俗はまさに消滅しようとしている[1)]。

このような状態にある八丈島の巫俗の調査・研究は急務の課題であり、同時に、その実態を明らかにする作業は離島における社会生活を理解するうえで欠かせないものといえる。

以上の問題意識から本稿は、八丈島の巫俗の内、特にミコケと称されるある特殊な状態に焦点をあて、報告と考察をおこなうものである。

八丈島では一般に、「ミコケのある女が巫女になる」［大間知　1951：261］とされ、「ミコケのある女」というのは以下のように説明される[2)]。

巫女になり得る素質を有しながら、なんらかの事情に妨げられて、未だ巫女にならずにゐ

*　つちや　ひさし　文教大学生活科学研究所客員研究員

る巫女候補者ともいふべきものである。彼女も不断は常人と変らぬつきあひをしてゐるが、巫女と同様に、月事の女のゐる家や死忌のかかつた家の物は絶対に食べない。どの女が月事中かといふことは彼女には直ぐわかるし、また死忌の家の食物を彼女に供したりすると気狂いのやうになるといふ［同上］[3]。

つまり、ミコケとはミコと成りうる気質、ある種の霊的な素質を意味する民俗用語であるといえるのだが、今回は、この気質・素質を島社会がどのように認識してきたのか、という点について、2004年から2005年にかけて筆者が八丈島でおこなった聞き取り調査で収集した事例をもとに考えてみたい。

1. 事例

まず最初に、周囲の人たちからミコケがあるとされる人物の生活史を事例としてあげる。

［事例1］男性、40代前半

子どもの頃より、普通の人が見えないものが見え、聞こえないものが聞こえたりしていた。また、自分の意志とは別に、予言めいた言葉などが発せられることがあった。そのため、子どもの頃、友達からは嘘つき呼ばわりされることも度々あり、また、予言めいたことを話すことが、周囲に動揺を与えてしまうことがあったことなどから、徐々に自身が体験する不思議な体験などについて他人に話さないようになっていったという。そして、ある決定的に神秘的な出来事を経験するにおよび、自身が普通の人と違うということを認識したという。

また、ある時分から、自身と関係の深いカミサマが祭祀を求めていることを霊的に感じていたが、20代前半、カミサマに関わることに嫌気がさし、それを拒絶した。そのため3、4年の間、わけの分からない高熱が続き、入退院を繰り返したという。その後、観念してカミサマを祀り、カミサマに関わることを始めたところ、生活も安定した。現在では、霊的な能力を使って数人の相談にあたっているという。

島の禁忌との関係では、葬式に行くと頭痛に見舞われるなど、死と関係するものに触れると不調がおこるという。

次に、島の宗教事情に詳しい、宗教的職能者２名（僧侶１名、神職１名）のミコケ観をあげる。

［事例2］男性、40代後半、僧侶

ミコケの人は、失せ物等、普通の人が気がつかないことや未来のことを言い当てたりする。また、霊的な世界のことなどを語り、デジャヴュー体験が多かったり、他人の話すことをその人が言葉を発する前にわかったりする。こうした感覚は、ミコになるにつれて徐々に強くなっていく。

ミコケの人は半人前のミコとしてみられ、尊敬の念を抱かれない（対してミコは畏敬の念でみられる）。また、気が触れた者と近いイメージがあり、ミコケを嫌う人もいる。しかし、ミコケと「気がおかしい」のとは違う。生活全体をきちんとみていけば、ミコケがあるとされる人は神仏を大切にし、生活態度もきちんとしており、時折人と違った言動があるだけなのに対して、「気がおかしい」人はそのかぎりではない。

ミコケがある人が総てミコとなるわけではない。ミコとなる人は、より一層の真摯な生活態度が要請され、その中で感覚が研ぎ澄まされていく。

［事例3］男性、40代後半、神職

ミコケのある人は、ダンシン（乱心？）すなわち、狂ったようになることがあるので、きちんとカミサマを憑けなくてはならない。昔はカミソーデをおこなった。また、ミコがミコケのある人に対してアドバイスをした。

ミコケは、カミサマが憑きたがり、憑いて色々なことを知らせたがっている。それを拒否して苦しがっている状態といえる。

年間に1件程、言動がおかしい人（ミコケがあるとされる人―筆者）のお祓いを頼まれることがある。しかし今は、ちょっと言動がおかしいと精神科の病院へつれていってしまう。一昨年（2002年―筆者）も、頼まれてある女性のお祓いをおこなった。その結果、本人は心身の辛い状態が軽くなったようだが、変なしゃべりはなくならなかった。そこで、家族はその女性を東京の精神科へ連れていくことを決めた。お祓いと精神科での診察の両方を並行して行ったほうが良いとアドバイスをしたがそれきりになってしまった。

その人（前述の女性に限らず、一般的に言動のおかしくなった人―筆者）がカミサマの道を踏まないでそうなのか、「本当の精神病」なのか、インネン（因縁？）でそうなのか、見分けがつかない場合が多い。

その他、60歳代半ばの女性から、カミサマやホトケサマ、日取りのことなどを異常に気にする人なども「ミコケがある」とされることがあるとの話を聞いた。

また、1960年代初頭に八丈島や青ケ島の調査をおこなった佐々木雄司によると、両島では、欠伸を神懸かりへの指標とする習慣があり、「よく欠伸する者を“ミコケ”があるという」［佐々木　1967：448］と報告している。

2. 考察

八丈社会におけるミコケ観について本稿での事例からいえることは、ミコケと心身の変調の関係性を島の人びとが認識しているということである。そのため、事例2で述べられるように、ミコケを狂気と親和性の強いものとして嫌う人も多いようである。実際、筆者の調査の中でも、ミコケのある人がいる家庭ではその事実を隠そうとすることが多い、との話は度々聞かされた。しかし、事例2、3に顕著にみられるように、ミコケにともなう心身の変調をいわゆる精神病の症状とは異なるとする認識もある。事例2では、ミコケがある人と「気がおかしい」人は、日常生活の態度で判別できるとしているし、事例3では、実際に区別するのは難しいものの、ミコケにともなう心身の変調が「本当の精神病」やインネンによる心身の変調とは異なるものであるとの認識が確認できる。ここで語られるインネンとは、祖先の行為に起因する災いのことである。例えば、祖先が殺人や盗みなどを犯した場合、その祖先の行為により、子孫が被るとされる病気をはじめとしたさまざまな災厄のことを指すのだが、インネンについての詳細は、別稿で触れたい。

ところで、事例3では、ミコケにともなう心身の変調が認められた人物に対し、カミソーデという儀式の執行が求められている。カミソーデとは、八丈島や青ケ島でおこなわれる一種の成巫

式であり、先輩ミコたちの指導のもとにおこなわれる。この儀式を通じて、カミサマがミコケのある人物に憑き、晴れて正式なミコとして社会的に承認されるのである[4)]。ミコケ観を考察するにあたり、カミソーデという形で、ミコケのある者をミコへと導くシステムが島社会の中に位置付けられていたというのは看過できない点である。カミソーデの社会的な機能の詳細は、今後の調査の中で、特に注意を払うべき課題の一つとしていきたい。

おわりに

八丈島の伝統的なミコは現在、存在しない。しかし、事例1でみたように、ミコケのある人物は現在でも存在し、表立っての活動はないものの、島内でシャマニックな動きをおこなってもいる。こうした動向が、伝統的な巫俗とどのような関わりを有しているのか、また、現代の八丈島の生活と関わる新たな巫俗としての展開をみせていくのか、今後、丹念に調査を重ね明らかにしていく必要があろう。それとともに、八丈島と非常に似通った巫俗が残る青ケ島や、シャマニズム研究の進んでいる奄美・沖縄等との比較なども視野に入れながら、八丈島の巫俗の調査・研究を深めていく考えである。

注

1）既に40年前、八丈島の巫俗が大きく変質し衰微しつつあることを佐々木雄司が指摘しているが、彼はその原因を以下の3点にあるとしている。
・急速な開発と近代化によってもたらされた共同社会の崩壊
・大戦後の新生活運動として行われたという“巫者依頼の廃止運動”
・津波のごとくおしよせてきた新宗教
［佐々木　1697：446］

2）八丈島では、女性だけではなく男性にもミコケという表現は用いられていた。

3）八丈島では、死と血に対する忌が強く、特にミコはこれらに敏感である。

4）蛸島直は、八丈島の民俗病因論の諸類型として、以下の6つを提示している。
(1)因縁(2)呪詛(3)祟り(4)祀り不足(5)召命(6)告発
ここでいう、(1)は「患者の発病の起因を何代か遡った祖先の行為に求めたもの」、(2)は「起因者が作用者の恨みを買ったことに起因している」もの、(3)は「神聖な事物に対して不敬行為を働いたことに起因する」もの、(4)は「死者の供養が足りないために、その子孫が病気に」なるもの、(5)は「神からミコになるよう選ばれたということに病因を求めるもの」、(6)は「犯罪や争い事が起きた場合にカナヤマサマを拝んで罪のある者を告発、あるいは威嚇するもの」である［蛸島　1981：77-80］。
事例3でいう、インネンは(1)に、ミコケにともなう心身の変調は(5)に関係してくるといえよう。

文献

大間知篤三　1951『八丈島――民俗と社会――』創元社
近藤富蔵編纂／八丈実記編纂会　1971『八丈實記』第三巻、緑地社
佐々木雄司　1967「我国における巫者（Shaman）の研究」『精神神経学雑誌』69巻第5号429-453
蛸島直　1981「八丈島の病気観――民俗病因論の可能性」『民俗学評論』第20巻21号67-89頁